

東方ユダヤ史から見たマルク・シャガール

角 伸 明

偶像崇拜禁止のために視覚芸術を禁じられていたユダヤ人の中から 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて画家が一挙に出現し始めた。その中にマルク・シャガールはいた。19 世紀末の東欧出身ユダヤ人画家出現の理由は、律法に基づいたユダヤの伝統的生活から離れて非ユダヤ世界に適応して行くユダヤ啓蒙主義＝ハスカラーの浸透に求められる。シャガールの生活史にはハスカラーの影響が刻印されている。父の代にセガールからシャガールへとロシア風に改姓され、マルクはロシア人中学校に入学して学び、絵画と運命的な出会いを行った。ハスカラーの浸透が画家シャガール誕生の社会的前提である。しかし、シャガールの絵にはユダヤの伝統的生活やユダヤ文化のシンボルが多く現れ、イディッシュ語慣用句に基づく構図が使用されている。ハスカラーの影響で現れたユダヤ人画家の中でもシャガールはそのユダヤ性で際立つ。シャガール絵画に独特のユダヤ的特徴を与えた力は 18 世紀後半から東欧のユダヤ社会で信仰されたハシディズムというユダヤ神秘主義である。シャガール家は代々ハシディズム信者であり、シャガールの絵にはハシディズム的感性が溢れている。代表作『私と村』に明白である。シャガールは芸術的感性の面ではハシディズムによって生み出された芸術家と言える。従って、シャガールを文化史的に見る場合、ハスカラーとハシディズムの二つを考慮に入れなければならないが、従来ハスカラーは合理主義的思潮、一方ハシディズムは民衆を愚昧化する非合理主義的思潮と考えられ、相対立すると考えられていた。しかし、ボグダン・フメリニツキーの乱以後の東方ユダヤ史の展開を追えば、両者はユダヤ正統派への信仰が崩壊した後に同時に現れた思潮であり、両者ともユダヤ神秘主義を源とすることが分かる。18 世紀後半にハスカラーはドイツユダヤ社会に広まり、ハシディズムは農奴制下のロシア・東欧のユダヤ社会に広まった。この仲の悪かった兄弟的思潮が 19 世紀末ロシアの反ユダヤ的環境の中で和解する歴史的展開を辿り、ロシアのユダヤ人はイディッシュ文化とユダヤ性を保持しながら非ユダヤ世界に適応するユニークなユダヤ精神を形成した。その精神は、ブンドという民族運動、イディッシュ文学と演劇の興隆、ユダヤ美術運動を生んだ。シャガール絵画は文化史的に見れば 19 世紀末にロシア的現実の中で形成されたユニークなユダヤ精神の成果である。

(かく のぶあき、同志社大学)

ドストエフスキーにおける「大洋」の譬え：思考の伝達の問題

加 藤 純 子

『カラマーゾフの兄弟』には世界は「大洋」のように触れ合っており、一端に触れれば別の一端に伝わり、との表現がある。『罪と罰』では「大洋」は「底なしの海」、「永遠の孤立」と並べられ、果てしなく続く孤立の状態を表していた。偏執狂の者が一滴の水を「大洋」の如くに考える、との言葉もある。さらに、ラスコーリニコフが見る夢の場面で思念（思想）の伝染が危惧される。一方、『カラマーゾフの兄弟』における「大洋」の譬えは教導僧ゾシマの言葉が回想される部分（第 6 編）にある。ここでは「大洋」の譬えは祈願の伝達に直接的に関わるものであるが、間接的には『罪と罰』の終盤で語られる伝染にも関わっていると考えられる。

ドストエフスキーは、登場人物たちを世間からの「無縁」の感覚や、野望の背中を押す「機縁」の働きと隣り合わせに置く（例えばラスコーリニコフ）。彼らには記憶や観念の連続性が作用している。ドストエフスキーはさらに祈りなど切望の伝達性を言うことによって、人が内心に抱く一つの言葉が次の言葉を連続的に生んでゆき、その出所と末端が思わぬところで明らかになる因果の不可思議さを示す。ドストエフスキーは 1) 人と人との関係の断絶感、2) 人の思考が他者に及ぼす作用の不可思議さを作品の中に繰り返し描き続けた。これを日本人は作品論あるいは翻訳の中で「縁」の概念によって捉えてきた。

ドストエフスキーは「大洋」の譬えを用いることによって世界の組織性を描く。ただし、思考が伝染あるいは伝達し、そこから生じる出来事すべてが繋がっていると見る場合、責任の所在が不明確になる可能性も含まれてくる。ドストエフスキーは、繋がりの不明確性、思念の流動性を含む「大洋」の譬えを用いることによって、1) 人々が抱く意思疎通が成り立つ共同体への憧れ、2) 内心の言葉が時間や空間の隔たりを超えて伝染する、もしくは伝達されること、3) この世は有機体のように繋がっていること、4) 責任の所在が不明になることも避けられないこと、を示すのである。

(かとう じゅんこ、大阪外国語大学)